
大事なことはすべて失恋から学んだ

坂上文隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大事なことはすべて失恋から学んだ

【Nコード】

N5839Y

【作者名】

坂上文隆

【あらすじ】

そのとき僕は失意のどん底にいた。あの日以来洋子が電話に出てくれない。本当に終わってしまったのか。僕たちは運命の人ではなかったのか。洋子のことを強く思ったそのとき、携帯が鳴った。「自分に失恋を乗り越える方法を教えたる！」。彼女は天使のテン。僕がなぜ失恋したのか、そして恋愛する意味についてテンは説き、その日から失恋との壮絶な闘いが始まった。

第 1 話 幸せな人たちの共通点

十一月二十九日、この日に永江公園に来たのは三度目だった。どうしても今日来なければいけないような気がした。しかし来てみたはいいもののここで何をしたいのか、答えはいまだに見つからない。こうして一時間以上ベンチに座って目の前の光景を眺めているだけだった。

そこにはジョギングで汗を流している人やレジャーシートを敷いて寝そべっているカップルがいる。親子でキャッチボールをしたり、兄弟で追いかっこをしている姿があれば、少し離れたところでは老夫婦が仲睦まじく並んでベンチに腰掛けている。

老若男女を問わずここにいるすべての人が思い思いに過ごしているように見えた。幸せと呼べる光景があるとすれば、目の前に広がるこの世界を言うのかもしれない。なぜならこれだけの人が集まっているのにみんな楽しそうで顔には笑顔があり、生気に溢れている。そして誰一人としていがみ合っている人がいないのだ。

翻って日常生活を見ればどうだろう。平日の自分の姿を思い浮かべた。朝の満員電車然り、仕事上の様々なトラブル然り、ストレスに満ちた毎日である。そう思うのは僕だけではないはずだ。同じ人間同士、どうしてこうも違うのか。どこで違ってしまったのだろう。

答えは「歩く速度にあり」。そう仮説を立ててみた。ジョギングをしている人を見てそう思った。彼は何も全力で走っているわけではない。周りの景色を楽しみながらゆっくり走っている。そうした目で見れば親子のキャッチボールも山なりで、ボールの速度がゆっくり見えてくるし、遊歩道を歩いている人たちも景色を見ながら、

あるいは連れと会話をしながらゆっくり歩いている。

一方で平日の僕たちは目覚めからすでに急いでいる。朝の支度から始まって駅のホームや仕事の準備など会社の始業時間にとにかく間に合うように知らずと駆け足になってしまっている。電車なんてすぐに次がやってくるのに、それを待つ余裕さえ持てずに多くの人が駆け込んで車内アナウンスで注意を受けている。

そんなに急いで何が変わるといのか。無理をして急ぐからストレスになるのであって、この公園にいる人たちのようにゆっくり過ごしてみれば心に余裕が生まれ、それが仕事の進め方に良い影響を与えてくれるかもしれない。それが昨日とは違った今日となり、その積み重ねがいつか目の前のこの幸せな光景になっていくのではないか。すべてはつながっているのである。その第一歩が「ゆっくり歩いてみる」こと。今より少しでいいから速度を落として歩いてみれば見える景色もきつと変わってくるはず。

第 1話 幸せな人たちの共通点（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第 2 話 娘の誘いを断るほど大事なものの

「ぱぱー、ぱぱー」

声のした方へ目を向けると、一人娘の千也香だった。小さな体で走ってきたせいか息を切らせている。それでもよほど僕に伝えたいことがあったのだろう、切らせた息を飲み込みながら口にした。

「ままの、かわりに、ばとみんとん、してくれる？」

千也香の走ってきた先で妻の真紗子が手を振っていた。

「ああ・・・」

思わず言葉が漏れてしまった。これまで周りのことばかり見ていたけど僕と千也香、そして真紗子は今、一直線上にいた。何だ、ここにも幸せがあるじゃないか。

恋人や友達、そして家族。そのつながりは通常目に見えない。一緒にいるからつながっているかといえばそんなことはない。同じ屋根の下で暮らしているのに言葉を交わさない親子や夫婦がどれだけいるだろう。作り笑いをして恋人や友達の「ふり」をしている人たちがどれだけいるだろう。しかし、そのつながりが見えたときには特別なものを感じ、そして安心する。僕にはそのつながりが今、見えた。

「ぱぱー」

千也香は僕の返事を待っていた。さっきまでの息切れはすでになくなっていた。

「パパはもう少しここにいたいから、これでママと一緒にジュースでも買っておいで」。

財布から二人分のジュース代を取り出して千也香に渡すと、肩を落としながら真紗子の元へ戻って行く。

「千也香、ごめんな。この埋め合わせは必ずするから」

この公園で何がしたいのか？この問いは一人娘の願いを断るほど大事なもののだろうか。どうも調子が狂う。幸せや家族について改めて考えたことなどこれまでなかったに。それもこれもすべては「あのメール」を見つけてしまったからだった。

第 2 話 娘の誘いを断るほど大事なもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第 3 話 結婚の決め手となったもの

昨晚、連絡が途絶えて何年も経つ前の会社の同僚からメールが届いた。あまりに突然の出来事で目を疑った。中村つて「あの中村」だよな？

中村は前の会社でトップ営業マンだった。成績はいつも上位で、全国の支店間でもたびたび入賞を果たして表彰されることもあった。それだけでなく男の僕から見ても男前で、性格もいい。誰に対してでも公平で、分け隔てなく接することができる。中村の周りにはいつも人が集まっていた。

完全無欠に見えるそんな中村にも、唯一といえる欠点があった。女性と会話ができないのだ。もちろん仕事上のことであればいくらでもできるが、プライベートとなるとトップ営業マンの話術は微塵も発揮されない。

中村がフラれた日、朝まで励ましたことがあった。フラれる理由はいつも同じ。「あなたは何も話してくれない」。電話やメールをするのはいつも彼女からで、中村からはほとんどしない。どうして連絡してあげないんだと聞いてみると、話すことがないと言う。

「女は話を聞いてもらいたい生き物だろ？なのになぜオレが話さなければいけないんだ」

酒が入った中村は饒舌だった。僕は聞き役に徹した。

「電話をかけてきたって何も話さないんだぜ？あなたの声が聞きたいのとか言つて。用がないならメールでいいとは思わないか？」

「何だっついていいんじゃないか？お前の仕事の話でもすれば喜んで聞いてくれると思うよ」

「そんなのでいいのか？女ってソムリエみたいなの、『貴婦人のようなの』とか比喩を使った愛の言葉をささやいてもらいたいんじゃないのか？」

中村が女性と会話ができない理由がわかった。女性を難しく考えすぎているのだ。僭越ながら僕は中村にアドバイスをさせてもらった。

「お前が良く使う『相手を褒める技術』を彼女に使ってあげれば、きっと喜んでくれると思うよ」

今度は中村が聞き役に徹して、時折メモを取りながらの恋愛レクチャーが朝まで続いた。

この件があつて中村とは仲良くなったが、僕が転職して次の会社へ移ってしまったため疎遠になってしまった。

中村から久しぶりに届いたメールの内容は、

「今彼女にプロポーズした。OKの返事もらった。すべてお前に教えてもらったとおりだった。心から礼を言うよ。ありがとう」

僕に教えてもらったとおりと書いてある。何のことだ？僕は中村に何を教えたのだろうか。

近況報告を兼ねて聞きたいことは山ほどあつたが、親友のお祝いに水を差したくはない。手短かにメールを返した。

「おめでとう。よくやった。それで結婚の決め手は？」

中村からすぐにメールが返ってきた。

「お前の一言だよ」

第 3 話 結婚の決め手となったもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第 4 話 おはよう

僕の一言？ますますわからない。その答えを求めてメールを送ったが返事は返ってこなかった。再度メールすることも考えたがまだ彼女と一緒にかもしれない。答えが届くまでの間、中村に言ったとされる「僕の一言」とやらを思い出してみようと思った。

当時の中村とのメールのやりとりがまだフォルダに残っていた。たとえば九月十四日、

「付き合って三ヶ月持たずにフラれた。やっぱり話してくれないからだ。今回はオレ、がんばったのに」

十月十二日、「取引先の女の子が気になっている。何て声をかけたらいい？」

十月二十八日、「何とかデートにこぎつけた。どこに誘ったらいい？」

当時の思い出がよみがえってくる。中村は自分の欠点を知っていた。それができないことでもがき、苦しんでもそこから逃げなかった。僕にメールを送りアドバイスを求めることで自分の欠点に立ち向かっていったのだ。

僕も面倒くさがらずにその都度アドバイスをした。それは友達とということもあるが、僕自身も同じような経験があったからだ。そう。恋愛の師匠と呼べる人に僕も中村と同じようなことをした。だから決して他人とは思えなかったのだ。

。それにしても女性が苦手だったあの中村がいよいよ結婚か……。人は成長するものだ感慨深かった。

成長は決して一人でできるものではない。成長の陰には必ず自分を押し上げてくれる人の存在がある。僕が真紗子と結婚したのもひとえに師匠のおかげだ。

「あれ……？」

僕の一言つてもしかして真紗子との結婚に関係あるのか？何だっけ？

中村から返信はまだこない。「僕の一言」が頭から離れなくなり、次のフォルダに答えを求めた。ここには中村以外にもたくさんメールが入っていた。ご丁寧に「有明だよ」というメールまで残っている。メールアドレスを見ても、その内容もまったく記憶にない。

このメールをなぜ削除しなかったのかまったくの謎だ。他にも中村とは関係のない、そうした類のメールが多かった。件数も多いし、別のフォルダを開こうとしたそのときだった。

「おはよう！」

目が釘付けになった。そんなはずはない。彼女からのメールはすべて削除したはずだ。

「あっ！」

なんと、保護されていた。しかもこのメールだけ別のフォルダに振り分けられていたので、削除したつもりができていなかった。日

付は？「十一月二十九日」。間違いない、彼女から最後のメールが届いた日だ。

「思い出したぞ、僕が中村に言った一言を」

思わず叫んだ。叫ばずにはいらなかった。中村だけではない。僕が真紗子と結婚できたのも、そしてあの失恋を乗り越えられたのも、すべて彼女が教えてくれた「一言」のおかげだった。

第 4 話 おはようこ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第 5 話 別れた理由が知りたくて

「今夜から明日朝にかけて厳しい冷え込みになりそうです」

テレビから流れる天気予報にも上の空だった。

一応、留守電にはメッセージを入れておいたけど、電話がかかってくることはないだろう。あの日を最後に洋子は電話に出てくれない。一体どうしてこうなってしまったのか。

僕が悪いのはわかっている。「別れましょう」と言われてもそれを受け入れられず、「電話しないで」と言われても電話してしまう。どうしてこうなったのか、その理由がわからないかぎり自分を止めることができなかった。なぜここまで嫌われなければいけないのか。好きという気持ちは消えてしまうものなのか。

友達にも相談した。彼らの答えは皆同じだった。

「あきらめたほうがいい」

でも、誰に何を言われようが洋子は戻ってきてくれると信じていた。なぜなら僕たちは「運命の人」だから。

運命の人とはいくつもの偶然が重なり合う人のこと。そうでなければこのすれ違う世の中でどうして男女が出会い、恋をすることができるだろう。たとえば僕たちにはこんな偶然があった。メール送信と同時に電話がかかってきたのである。メールを送った側はこのときどう思っただろうか。

僕は洋子の声が聴きたくて家の電話から電話したことがあった。そしたら洋子は不思議そうに聞いてくる。

「もうメール届いたの？」

僕はメールが苦手で、その返事を電話で応えることが習慣になっていたために洋子はそう聞いたのだろう。しかしメールは届いておらず、洋子がこのとき何を言っているのかわからなかったので聞いてみた。

「そのメールに何て書いたの？」。

洋子がメールの内容を話し出そうとしたそのときだった。机の上に置いてある携帯電話が鳴り出して、画面を見てみると「新着メール」と表示されていた。

「もしかして、今届いたこのメールのことを言ってるの？」

そう尋ねると、受話器越しに洋子の異変が伝わってきた。

「ねえ、聞いている？」

「大好き」

「いや、そうじゃなくて……」

「大好き」

「だから、違っつて……」

「大好き」

「じゃあ、ゴキブリも？」

「それは嫌い、でも大好き」

この偶然がよほどうれしかったのだろう。僕のいじわるを除いて洋子は何を聞いても「大好き」としか言わなかった。何度も何度も心に溢れる感情をすくい出し、それをそのまま僕に届けてくれたのだ。

洋子が僕の誕生日を祝ってくれたときもそうだった。それまでの楽しい会話から一転、洋子は突然黙り込み、うつむいてしまった。

「どうしたのだろうか？」

僕は事態の状況を飲み込めなかった。何か失礼なことを言ってしまったのだろうか。しかし、そうでないことは洋子の次の一言ですぐにわかった。黙り込んだのでなく、それを言おうかどうかどうしようかためらっていたのだ。

「実は、前の彼と別れた日が今日なの」

洋子が自分から過去の男の話をしたのは初めてだった。この日のために用意した、洋子なりのサプライズなのかもしれない。

別れは出会いの始まりだと言う。たしかに第三者的にはそうかもしれないが、当事者にとってその実感を得るのはもう少し先である。別れた悲しみを乗り越えて、その出会いに気づくまでにはどうしたって時間がかかる。しかし、それが具体的な形となって表れたとしたらどうか。たとえば前の彼と別れた日が、次に好きになった人の誕生日だとしたら？これ以上の「別れは出会いの始まり」を表すものが他にあるだろうか。

第 5 話 別れた理由が知りたくて（後書き）

いつも感想をありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かい目で見守ってください。

第 6 話 洋子との馴れ初め

洋子は僕と出会う前、悲しみのどん底でもがいていた。見るに見かねた友人の美穂子が励ましてあげてほしいと紹介したのが僕たちの馴れ初めだった。

その晩、洋子が電話をするからよろしくねと美穂子は言った。悲しんでいる女性を励ますことなどまるで自信がなかったが、引き受けてしまったからには後には引けない。僕を紹介した美穂子の面子だつてある。

洋子から電話がかかってくるまでにやるべきことはしておきたかった。とりえあえず思いついたことといえば本屋へ行つて「元気になる言葉」関連の本を見繕つて、夜の電話に備えることだった。

「明けない夜はない」

「止まない雨はない」

「夜明け前が一番暗い」

ページを開く度に元気になる言葉が表れる。世の中には人を励ますたくさんの言葉があるのだと思つた。

当時の僕は新入社員で、若葉マークの駆け出しもいいところだった。仕事を覚えるだけで精一杯で、慣れない生活が続くどこか疲れていたのかもしれない。洋子を励ますつもりで用意した「元気になる言葉」に僕自身が励まされ、少し元気になったような気がした。

いつの間にか本の世界へと引き込まれてしまった僕に、携帯の着信音が本来の目的を思い出させてくれた。ついにそのときがやって

きたのだ。僕はひとつ深呼吸をして、携帯を取り上げた。

「もしもし」

「元気になる言葉」をいつでも取り出せるように、何なら僕がいさつきアンダーラインを引くくらい共感した言葉を紹介しようと横に置いて励ます気満々でいたのだが、結局本の出番はなかった。

お互いの自己紹介から始まって、共通の友人である美穂子のことや世間話に終始して、気がつけば三時間以上話をしていた。

普通に楽しかった。電話がかかってくるまでの不安を思い返せば笑わずにはいられない。取り越し苦労とはこのことを言うのだろう。つい先日、上司に言われたことを思い出した。

「仕事は段取りでほとんど決まる」

仕事に取り掛かる前は、あらゆることを想定して準備を怠るなど徹底的に仕込まれた。当時はその意味がわからず無駄な作業が多いのを非効率的に思っていたが、実際にそれでうまくいくことは多かったし、今回もうまくいった。

要するに始まる前は不安が付きまるとしてネガティブ思考になりがちだけど、準備をして頭や体を動かすことで一つずつ不安を消していく。流した汗は自信に替わり、望む結果が生まれやすくなる。上司はそう言いたかったのだろう。

最初の電話で話が合った僕たちは次の日も、また次の日も電話で話をした。不思議なことだが、

「今日何してたの？」

たったそれだけで一時間以上も会話が続いた。こんな人初めてだった。洋子もそう思ったのだろう。話を続けていくうちに笑いがひとつ、またひとつ増えていった。洋子とは電話だけでなく、メールやデートを通して関係が深まっていった。

第 6 話 洋子との馴れ初め（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第 7 話 こんな偶然ってあるのかな

ある日のこと。一緒にご飯を食べる約束をしていたが、僕の仕事
が早く終わり洋子を駅の改札まで迎えに行ったことがあった。ちよ
うどラッシュと重なって改札付近はとも混雑していた。これでは
洋子を見つけれないと思い、僕は改札近くのコンビニにいたこと
をメールで告げた。

しかし約束の時間を五分、十分と過ぎても洋子は現れない。時間
に厳しい洋子には珍しいことだった。事故にでもあったのか？一抹
の不安が頭をよぎる。十五分を過ぎても現れなかったので心配にな
り電話をした。呼び出し音が鳴ったとほぼ同時に洋子は電話に出た。

「もしもし、今どこ？」

洋子から意外な答えが返ってきた。

「あなたの隣よ」

携帯電話を持ちながら左右を確認した。何と僕の左隣に微笑んで
いる洋子が立っているではないか。

話を聞くと約束の時間より少し早く到着したようだ。洋子は僕に
すぐ気づいたが、僕がなかなか気づかないことに腹を立て、僕の目
の前を何往復もしたそうだがそれでも僕は気づかなかったようだ。
でも自分を探している真剣な表情がうれしくて、その姿を横で見
ていたという。

着いたら声をかけてくれればいいのに……。でも、僕の鈍さ

が招いたことだから言つに言えなかった。

「あれっ？」

僕の声に反応した洋子はバツクに携帯電話をしまいながら尋ねた。

「なあに？」

「それ見せて」

「それって？」

「携帯」

僕の携帯電話の色は淡いブルー。洋子も同系統の色を持っていることは前から知っていたが、色があまりにも似すぎていたのでこの機会に二つの携帯電話を並べて確かめてみようと思った。

「うわっ！」

ほぼ同時に二人は声を上げた。そうなってほしいと願ったことはあったが、まさか本当に実現するとは……。僕たちの携帯電話は同じ機種だったのである。しかも色まで同じ。

それが最近発売された機種ならまだわかる。しかしそうではなくて、かれこれ二年近く前のものである。その間どれだけの機種が各メーカーから発売されただろう。そう思うと運命的なものを感じずにはいられなかった。

「すごいね」

「うん、すごい」

「まさか同じ携帯だったなんて……」

「それもそうだけど、これを見て」

二人が同じ機種で色まで同じ。これ以上に驚くことが他にあるのか。洋子はそれを手にとって見せた。

「このストラップ」

「うわっ！」

僕は今日二度目の声を上げた。二台並んだ同じ携帯電話の先にっいているストラップはこれまた同じ「天使の翼」だった。

「どうしたの、これ？」

「うん。これを付けていると、好きな人に想いを届けてくれるんだって」

「こまでくると驚きを通り越して笑えてくる。理由まで同じだった。本来ストラップをつけたいこの僕が、天使の翼だけは付けている。口下手な僕が好きな人に想いを伝える方法はただ一つ、道具に頼ることだった。周りから成功体験は聞いていたし、これを付けていれば想いは届くんだと自信を持って気持ち伝えることができる、いわばお守りのようなもの。なかなかその機会は巡ってこなかったが、いつか巡ってきたら十分に活躍してもらおう。出会いなどいつ訪れるかわからない。チャンスを逃すくらいなら、頼れるものには何でも頼ろうと思って付けていた。

その晩の僕たちはこの二つの偶然に興奮していた。食事をしながらずっとこの会話で盛り上がった。

「こんな偶然ってあるのかな」

この台詞が何度出てきたかわからない。僕だけでなく洋子もきつ

と運命的なものを感じたに違いない。天使の翼はこのとき僕たちの
想いを届けてくれたのだ。

第 7 話 こんな偶然ってあるのかな（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながります。
これからも温かく見守ってください。

第 8 話 運命の人なら別れないはずだろう

洋子との思い出が次々とよみがえってくる。僕たちはお互いを運命の人と思うほど強烈に結びついていたはずだった。

メールと電話が同時だったとき。前の彼と別れた日が僕の誕生日と同じだったとき。そして同じ携帯電話とストラップ。

これほどの偶然が重なり合いながら、今では電話に出てくれない。

あの「偶然」に出会ったときの目の輝きは何だったんだ。運命の人なら別れないはずだろう。一度離れてもやり直せるのが運命の人ではないのか。なぜなんだ、なぜなんだ、洋子。僕たちには笑い合った日々がある。ケンカだって何度もした。しかし、その度に仲直りをして二人の絆は強くなっていっただろう。

今回だってケンカみたいなものはず。付き合っている二人にすれ違いはよくあることだ。ならばこれまでどおり仲直りできるはずじゃないか。どうして今回は違うんだよ。いつものように怒って泣いて、また二人で話し合えばいいじゃないか。なぜそれさえも拒絶するんだ、洋子、洋子、洋子……。

うつむいているそばで携帯電話のストラップが目に入った。洋子も付けている、あの天使の翼だ。僕は携帯電話とともにそれを手に取り握り締めた。

この二つは洋子と同じものなのに、これを見たときの僕たちの気持ちも同じだったはずなのに、今はもう心が通わない。

形あるものは残り、それ以外は消えていく運命なのか。僕たちが付き合った時間、そのすべては幻だったのか。僕が洋子を好きだったという気持ちも洋子がそうであるようにいつか消えていってしまうものなのか。

忘れたくはない、この気持ち。でもどうすればいいだろう。どうすればあの日の二人に戻れるだろう。考えれば考えるほどこのことしか思い浮かばなかった。僕の想いはもう届かない。

「チクッ」

強く握り締めていたせいかストラップの天使の翼が僕の手を刺した。

「お前まで僕を裏切るのか？」

天使の翼に向かって僕は言った。

「お前は想いを届けてくれるのだろうか？それがお前の役割だろうか？ならば僕の想いも届けておくれよ。洋子にこの気持ち、届けておくれよ。お願いだよ、お願いだよ……」

両手でそれを握り締め、何度も何度も祈るように言った。

どれくらいそうしていただろうか。両手の中から携帯電話のけたたましい着信音が鳴り響き、それは雷鳴のように僕の耳に轟いた。

第 8 話 運命の人なら別れないはずだろう（後書き）

いつも感想をありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第 9 話 二人で決めた仲直りの方法

画面を見てみると「非通知」と表示されている。誰だろう、こんな時間に。時刻は深夜二時を過ぎようとしていた。

ま、まさか・・・、洋子？ようやく僕の想いは届いたか？そう期待してしまうのは、この時間に電話をかけてくるのは洋子以外考えられなかったからだ。

ケンカしたときはいつもそうだった。メールは「件名なし」で送ってきたし、電話も深夜が多かった。

僕たちはケンカをした当日に仲直りをしようと話し合ったことがあった。二人とも些細ないざござが原因でケンカ別れになってしまった過去があり、もう大切な人を失いたくない。だったらどちらが悪くてもケンカをした当日に仲直りをしよう。たとえ相手を許せないほど憎んだとしても、話し合えばなんとかなるんじゃないか。ならなかったとしても話し合うという過程が大事。そこから生まれたものを仲直りのきっかけにして大事にしていこう。これまでそうやって仲直りをしてきた。

非通知と表示された携帯はそれからも鳴り続けた。しかし、今は誰とも話したくなかった。たとえ洋子だとしても。

どうしてこのようなことになったのか、どうすれば洋子とやり直すことができ、もう一度あの笑顔を取り戻せるのか、一人でじっくり考えたかった。こうなつたすべての原因は僕にある。しかしこれまでは話し合い、謝ることで許しを得てきた。

では、今回なぜそれが通用しないのだろうか。あれほど好きだと言っていた洋子が電話に出ない理由とは何か。わからない。その間も携帯電話は鳴り続ける。

もし本当に洋子ならその理由をすべて聞いてやろう。間違い電話ならそれでいい。僕は通話ボタンを押し、電話に出てみることにした。

「もしもし」

「自分、やばいで」

な、なんだ？一瞬、自分の耳を疑った。携帯電話から聞こえてきたのは関西弁の女の子だった。もう一度聞いてみる。

「もしもし」

「このままやったら自分、どんどんダメになってくで」

やっぱり関西弁だ。しかも聞いたことのない女の子の声。僕の知り合いに関西弁を話す女の子はいない。やっぱり間違い電話だったか。洋子からの電話だと期待した自分が少し恥ずかしかった。そんなはずあるわけがないのに。僕は改めて聞いてみた。

「あ……、どちら様ですか？」

「洋子のことや」

第 9 話 二人で決めた仲直りの方法（後書き）

いつも感想いただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。

これからも温かい目で見守ってください。

第10話 失恋したら取るうとする行動

彼女ははつきりと「洋子」と口にした。なぜ洋子のことを知っているんだ？ただの偶然か、あるいは洋子が僕をあきらめさせるために友達に頼んだのか？いづれにしても突っ込んで聞いてみる必要がある。

「洋子のことって何ですか？」

「とぼけんなや。今も電話しようとしてたやろ？」

いや……、それは違う。元に戻れますようにとお祈りはしてはいたけど、さすがにそれは言えなかった。

それにしてもなぜ彼女は電話すると思ったのだろう。洋子に止めさせてほしいとでも頼まれたからか。

「洋子のこと、知ってるんですか？」

「洋子のことだけやない。自分のこともよう知つとるで」

僕のことも知ってるだつて？

「僕の何を知ってるというんですか？」

だんだん腹が立ってきた。深夜遅くに非通知で電話してきて僕のことを知ってるだつて？冗談じゃない。洋子だって僕のすべてを知っているわけではないのにその友達にわかつてたまるものか。

「生年月日などはもちろんのこと、これから自分が洋子に取るうとしている行動とか。いろいろわかつとるで」

洋子は自分でも言っていたが、僕とそれ以外の人とは接し方が違うらしい。つまり、僕と一緒にいるとき以外の洋子のことを僕は知らない。なぜ彼女が僕の生年月日を知っているのか。どのような会話で洋子はそれを話したのか。「彼は何歳？」と聞くことはあっても、生年月日を聞く人は少ないだろう。

そして気になったのは「僕がこれから洋子に取ろうとしている行動」についてだ。たしかに今は電話しなくても、明日以降家の電話から電話してしまう可能性は十分ある。というかしてしまうだろう。その他に彼女は何をわかっているのか。内心、ドキドキしながら聞いてみた。

「これから僕が取ろうとしている行動って何ですか？」

「自分、今悩んどるやる？なぜあんなに好きだと言ってた洋子が電話に出てくれへんのかって。自分が初めて家の電話を引いたとき、洋子はめっちゃ喜んでったもんな」

えっ？そんなことまで知ってるの？どうやら「いろいろわかってる」という彼女の言葉は嘘ではなさそうだ。そう、あれは僕が一人暮らしを始めたときだった。

第10話 失恋したら取るうとする行動（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第11話 星の王子様へのお願い

当時、洋子との連絡手段は携帯電話だけだった。僕は一人暮らしの寂しさもあって毎晩洋子に電話をした。その日の出来事、思いついたことなどどんな些細なことでも僕の思っていることを洋子に伝えなかった。洋子の声が聞きたかった。

しかし、現実とは甘さと厳しさを兼ね備えるものである。翌月の携帯電話の請求書を見て我が目を疑った。そこには前月の何倍もの請求額が記載されていた。そしてほとんど条件反射で洋子へ電話をする。こういうことをしているから電話料金がかさむのに。

洋子は固定電話を引くことを提案してくれた。自分もそうしているのだと言う。しかし手続き等の面倒もあってなかなか決断できなかった。

次の日も、そして次の日も携帯電話から洋子へ電話した。このとき僕はあきらめていたんだと思う。他の出費を削ってでも洋子と話したがかった。

洋子は電話するたびに聞いてきた。

「固定電話引いてみれば？そのほうが絶対お得だよ」

なかなかそうしない僕に洋子は電話だけでなく、メールでもアプリを試みた。

「星の王子様へお願いがあります。私の大好きな人が固定電話を引いてくれますように」

「ここまで言われるとさすがに引かなくやまずいという気持ちになつてくる。洋子の顔を立てるために僕は固定電話を引くことに決めた。それを伝えたときの洋子の声は今でも忘れない。」

「ほんとに？ほんとに？やったー！」

洋子は僕だとわかると声が上がらず。このときの「やったー！」はさらにその上を行き、毎日電話している僕でさえ初めて聞いた声だった。このときまた一つ、洋子の知らない部分を知ることができ、洋子と同じくらいうれしかったことを覚えている。

第11話 星の王子様へのお願い（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第12話 絶対言ってはならない恋愛の禁句

彼女は僕がこれから取るであろう行動について話してくれた。

「失恋した者が連絡を絶たれた後に取る行動は次の三つに分けられる。一つは自分を責めて殻に閉じこもってしまうこと。もう一つはそれ以外の連絡手段を探して復縁を迫ること。そして最後は寂しさを埋めるために新しい恋人を探すこと。自分と洋子は強く結びついておったからウチはこの二つ目ちゃうかと踏んだんやが、どや？当たつとるやろ？」

洋子と仲直りがしたい。これまでのことを反省し、これからは二度とその手を離さないよう大事にしていきたい。それを伝えることで、その手段を探すことで今は頭がいつぱいだ。彼女の言うとおり「二つ目」という指摘は当たっている。

しかし、僕の取ろうとしている行動がわかったところでもうにもならない。知りたいのは、どうしてここまで洋子は僕を嫌いになったのか。その理由を友達の彼女なら知っているかもしれない。仮に知らなくても、同じ女性としての意見を聞いてみたかった。

「どうして洋子は電話に出てくれなくなってしまうほど僕を嫌いになってしまったのでしょうか？」

「それは自分が、絶対言ったらアカン恋愛の禁句を言ったからや」

絶対言ってはならない恋愛の禁句だっけ？そんなものがあるのか？しかもそれを僕が口にしたって？

「自分、洋子に別れようと言ったやろ？それは言ったら絶対アカン
ねんで」

第12話 絶対言ってはならない恋愛の禁句（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第13話 洋子との別れ

たしかに別れようと僕は言った。そのころはお互いの時間が合わず、月一回会えればいい方だった。遠距離恋愛じゃあるまいし、これで付き合っていると云えるのか。そう言つと洋子は怒気を強めて言い返した。

「だつたら時間を作る努力をもつとしてよ」

この言葉の裏には「あたしはその努力をしてるわよ」という意味が込められていた。あれはデートの前日に電話したときのこと、洋子は風邪を引いていて、会話の最中に何度も咳き込み苦しうだった。「大丈夫?」、僕がそう聞くと洋子は心配かけまいと「大丈夫」と答え、「明日のデートは延期する?」と聞けばやっぱり「大丈夫」と答えた。そして当日、洋子に会うと髪が少し濡れていた。風邪を引いているのに朝からシャワーを浴びたのだろう。まったくなんてヤツだ。

洋子が怒るのも無理はない。洋子は努力をしているのに、僕は不満ばかり。悪いのは僕だった。しかし寂しさ故のいらいらが冷静な判断を失わせ、売り言葉に買い言葉でついその言葉を口にしてしまった。

「もう、いいよ。別れよう。洋子と話してもケンカばかり。全然楽しくないよ」

洋子の顔から血の気が引くのが受話器越しからでもわかった。さつきまでの怒りに満ちた声は懇願する声へと変わり、思い止まるよう願い出た。

「まだ早いよ。私たち、これからじゃない」

それから何度も慰留されたが、「別れよう」の言葉が口から出た瞬間、僕の脳は最後まで別れ以外の言葉を拒絶した。受話器からは洋子のすすり泣く声だけが深夜の静寂に響き渡った。

永遠に続くと思った恋愛も、幕切れは呆気なく訪れた。この日で僕たちは終わったはずだった。しかし僕は洋子を思い出してしまったんだ。

第13話 洋子との別れ（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第14話 別れて初めての電話

仕事から帰りいつものようにシャワーを浴びて、髪を乾かそうと引き出しからドライヤーを出したときだった。奥からコロコロと、何やら光るものが転がってきた。拾い上げるとそれは洋子が使っていた香水の小瓶だった。何でこんなところに……。

照明に反射したそれはまばゆい光を放っていた。キラキラと輝く洋子の香水。まるで僕たちの思い出を照らしているようだった。強い郷愁に誘われて思わず宙に振りかけた瞬間、当たり一面に洋子の匂いが広がった。胸が急速に縮こまった。これまで閉じ込めてあった洋子との思い出が一気に飛び出した。

洋子の声が聞きたい。久しぶりに洋子を想った。でも僕たちは別れた身。電話をすることは許されない。でも……。

僕は賭けに出てみようと思った。番号表示で五コールまで。それを出なければもうしない。香水も処分して、洋子のことも忘れよう。

出てほしいような、出てほしくないような複雑な気持ちがかき乱す。一コール目、二コール目、三コール目。僕は心の中で叫んだ。「頼む、出てくれ」。

「もしもし」

久しぶりに聞いた洋子の声はどこか寝ぼけ声だった。付き合っていたころは平気で起きてた時間でも、僕と別れて生活習慣が変わったのだろう。

「お久しぶりです」

その後によく言葉が出てこなかった。自分から振っておいてどの面下げて電話したのか。僕には負い目があり、それが次の言葉を遮っていた。

それでも一言、三言話していると、洋子の声が一瞬高くなった。

「あつ……」

僕の直感は正しかった。洋子はそのとき寝ていて、枕元で鳴った携帯が着信でなくアラームだと思ったらしい。決して僕だとわかって電話に出たわけではなかった。

それから世間話で一時間以上話をした。少しぎこちなさは残ったが久しぶりに洋子の声に触れた。話せて楽しかった。電話をしてよかった。洋子はあれから部署が異動になり、新しい仕事を覚えるのに忙しく毎日を過ごしているという。「大変だね」。僕は洋子を労わった。明日早いからというので電話を切った。その途端、涙が止まらなくなった。僕は気がついたんだ。今でも洋子が好きだということ。そして犯してしまった過ちに。

次の日も声が聞きたくて電話をした。僕の気持ちは昨日の電話で付き合っていた当時にすっかり戻ってしまった。しかし洋子はいえは最初は電話に出てくれたものの、だんだんと留守電が多くなった。仕事が忙しいのだろう。付き合っていたころはそれでも必ず掛けなおしてくれたものだがそれもなく、そしていつも僕が電話をしていた。不安になって洋子に聞いてみた。

「いつも電話するの僕なんだけど、洋子からは何か話したいこと

ってないの？」

そのとき時間は止まった。

「もう電話しないでほしいの」

「えっ……」

メールもなければ電話もない。薄々は気づいていた。僕は避けられていたのではないかって。それは思い過ぎだと自分に言い聞かせて何とかここまでやってきたが、さらに決定的な言葉は続いていく。

「別れたんだし、私仕事が忙しいし、あなたと話すことはもう何もないの」

電話をすれば声を上ずらせてまで喜んだ人が、もう電話しないでと言う。僕の中で洋子はあのころのまま何も変わっていない。これは夢なのか。僕の過ちに対するちよっときつめのいたずらなのか。もう十分反省している。頼むから嘘だと言ってくれ。悪い夢なら早く覚めてくれ。

第14話 別れて初めての電話（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かく見守ってください。

第15話 恋愛の行き着くところ

これが洋子との最後の会話だった。悪い夢だと思っていたものは、現実だった。

「自分に別れようと言われて洋子は毎晩泣いとうたんやで。ご飯も食べられず何も考えられずに無気力になってもって、見るに見かねた友達が交代で洋子に添い寝までしてたんやで。それを今さらやり直したいって自分、勝手すぎるやろ」

言葉が出なかった。僕と別れてそこまで苦しみ、悲しんでいたのか。僕は僕と一緒にいる以外の洋子のことを何も知らない。美穂子の紹介で初めて電話したときも、僕に心配をかけまいと気丈に振舞っていたのは何となくわかったが、一人になるとここまで弱くなってしまうなんて。

自分でも勝手すぎるといふのはわかってる。一度別れたのにもう一度やり直そうなんて虫が良すぎる。それが片思いだったら僕はあきらめていただろう。しかし僕たちは付き合い、お互いを運命の人と思うまで強く結びついたのだ。運命の人ならやり直すことだってできるのではないか。僕はもう一度洋子とやり直したいんだ。

「恋愛はな、結婚するか別れるか。行き着くところはそのどちらかしかあらへん。たとえそれが運命の人やったとしても、別れたら終いなんや。同じ人との恋愛は一度だけやから輝くんやで」

僕たちは結婚する前に別れた。同じ人との恋愛は一度切りで別れたらそれでお終い。でも、それって寂しくないですか？ だったら運命の人って何だろう？

「別れたらお終いって、それは運命の人でもどうにもならないもんですか？それでは何のための運命の人なんですか？運命の人って何ですか？」

僕は「運命の人」について立て続けに質問した。彼女がそこまで言うのならきつとその意味を知っているのだろう。それでもやはりどうにもならないものなのか。

「運命の人ってな、ただの言葉やねん。誕生日が同じだったり、趣味が合ったり、自分たちのように携帯やストラップが同じだったり、そうした偶然を人は運命と思いよる。それはきっかけにはなるかもしれないけど、そこから先は二人が努力して関係を築いていくものなんや。恋愛ってな、努力を止めると終わってしまうものなんや」

第15話 恋愛の行き着くところ（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第16話 失恋を乗り越える方法

彼女の言うとおり、僕たちが強く結びついたのは偶然がきっかけだった。こんな偶然あるわけがない。それが三つも四つも続けばどうしたって二人は特別な関係だと思っただろう。しかし彼女に言わせれば、それはきっかけであって運命の人とはただの言葉であるという。

そしてもう一つ、彼女は大事なことを教えてくれた。努力を止めると恋愛は終わってしまうというこの言葉、僕たちの恋愛が終わってしまったのはその努力を怠ったからだだった。初めは毎日していた電話も、二日に一度になり、三日に一度になり次第に洋子から掛かってくる電話のほうが多くなっていった。洋子に興味がなくなっただけではない。嫌いになったわけでももちろんない。ただ、何と云うか、心の中の何もなかった空間に「洋子」という新しい場所ができたことに安心したのかもしれない。電話をすればいつでも出てくれるし、折り返してもくれる。

一度安心感を得ると、洋子に夢中だった時間が次第に自分の時間へと関心が向かっていった。これまで途中で切り上げていた仕事にも期限はある。いつかは終わらせなければいけない。それに趣味や自分の可能性を広げてくれる新しいことにだって挑戦していきたい。そうそう恋愛にばかり時間を割けないと思ったことが気がつけば二人の関係に溝ができ、そしてケンカが多くなっていった。

「自分が別れようと言ったんやで。洋子と恋愛をする努力を投げ出したんやで。そないなヤツにどうして洋子がもう一度惚れ直すと思っ？」

携帯を持つのがやっとだった。それくらい全身から力が抜けていった。何の反論もできない。どうやら認めなければいけないようだ。僕たちは終わったということ。

運命の人ならもう一度やり直せる。今まで信じていたものが、唯一の希望がこれで完全に消えた。僕の目の前には絶望という名の闇しかなかった。何も見えないし、見ようという気力すらない。受話器から聞こえてくる彼女の声に反応するのが精一杯だった。

「自分、失恋を乗り越える方法って知ってる？」

第16話 失恋を乗り越える方法（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第17話 失恋を乗り越える第一段階とは

失恋を乗り越える方法？失恋したのは初めてではないし、これまでだって乗り越えてはきたと思う。でも今はそれを考える気力なんてない。

「失恋を乗り越える第一段階は別れを受け入れることや。しかしこれがなかなかできひん。さっきまでの自分のように謝ればやり直せるんじゃないかとみんな期待を持ってしまっくんや。だから苦しいし、いつまでも前に進まれへんから苦しみも続いていく。自分は今ここにおる。そして第一段階クリアや。よく受け入れたな。えらいで」

えらいで、か……。僕は褒められたのが、洋子の友達の彼女に。

「失恋したときって、目の前が真っ暗になるやろ？」

これまで無気力だった体がこのとき初めて反応した。

「はい、今の僕がそうです」

「それは、洋子という太陽が西の空へ沈んでいってしまったからなんや」

うまいこと言うなと思った。今までは洋子とやり直せると思っていたから視界を保てたけど、それがなくなり目の前は真っ暗になった。彼女は洋子を太陽に例えて真っ暗になった原因を僕に説明してくれた。何てわかりやすい説明なんだ。

「でもな……」、彼女は続けた。

「明けない夜はないんやで」

「あつ！」

この言葉は最初の電話で洋子を励まそうと用意したものだ。それが今度は僕が励まされることになるなんて。これまでの流れを見ればまさか隣に本があり、僕のような付け焼刃ではないだろう。きつと彼女自身がこれまで何度も失恋を乗り越えてきた経験から出た言葉だと思つ。

「あれっ？」

ふと疑問に思った。どうして彼女はここまで僕を思ってくれるのか。洋子をあきらめさせるのならもう十分のはず。「失恋を乗り越える方法」なんてわざわざ教えてくれなくてもいいはずだ。本当に彼女は洋子の友達なのか。彼女は一体誰なんだ。

「ほんならばちばちいこか？テン式失恋を乗り越える方法を」

「テン式？」

テン式って何だ？僕は思わず口にした。

「あつ！自己紹介まだやったな。ウチな、実は天使やねん。信じられんかもしれへんけどほんまの話。天使のテン。よろしく頼むで」

今までの言葉がこの一言ですべて胡散臭く思えてきた。天使って……なぜ天使がわざわざ携帯電話を使って電話する？神々しい光を放つて空から舞い降りてくるものだろう。しかも関西弁だし。天国ではみんな関西弁なのか？

もし元気だったら延々と突っ込んでいただろうが、失恋直後で明日さえ見えない僕に当然ながらその気力はない。この際天使だろうが何だっていい。僕にとって大事なのはこの闇を抜けることだった。

「よろしくお願いします」

僕はテンに教えることを選んだ。

「ほんなら仕切り直しや。いくで。テン式失恋を乗り越える方法を」

こうして自称天使のテンとの不思議な関係が始まった。

第17話 失恋を乗り越える第一段階とは（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第18話 失恋すると周りが見えなくなるのは

「まず初めに、聞きたいねんけど」

いよいよテンの講義が始まる。緊張のせいか受話器を持つ左手が震えた。

「自分、ごみ箱満杯なんとちゃう？」

「は？」

思わず声に出してしまった。

「ごみ箱だけやなく、灰皿も満杯なんとちゃうん？」

一体何を言っているんだ。失恋を乗り越える方法というから愛だの喪失感だの、そうした思想的なところから入ると思っていたが、いきなりごみ箱や灰皿ときた。今後の展開がまるで予想できない。本当に失恋を乗り越える方法までたどり着くのだろうか。僕はわらにもすぎる気持ちで教えを請おうとしているのに。そう思うとただん腹が立ってきた。

「ごみ箱や灰皿が満杯なのと失恋を乗り越える方法、どんな関係があるんですか？」

僕の切迫した気持ちなどおかまいなしに予想外の展開はさらに続いた。

「アリもアリも大アリ喰いやで」

ふ、ふざけてる。こいつ、絶対ふざけてる。さっきの名言の数々
は一体何だったんだ。太陽の件なんて感動さえしたのに。

「まあ、そない怒らんと最後まで聞いてや。今の自分には欠けて
るものがあるねん。何やと思う？」

僕に欠けているもの？少し考えて頭に浮かんだものをそのまま答
えた。

「ありのままの現実を見る、ことでしょうか？」

「アハハ。おもしろいな、自分」

僕の答えを聞いてテンは笑った。何が面白いんだよ。真剣に答え
て損した。

「ちやう、ちやう。それもあんなけど、ウチが言いたいののは失
恋すると周りが見えなくなるということなんや」

さっき言っていた、失恋すると目の前が真っ暗になるといふもの
にどうやら関係がありそうだ。ここは黙って話の続きを聞いてみよ
う。

「真っ暗になって闇に包まれるのは何も未来だけやない。失恋は
現在も、そして自分の周りさえ見えなくさせてしまうんや」

第18話 失恋すると周りが見えなくなるのは（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第19話 人が変わろうと思ってても変わらないその理由

なるほど。それでごみ箱と灰皿か。僕は部屋を見回してみた。テ
ンの言うとおりごみ箱と灰皿は今にもこぼれ落ちそうなほど溢れて
いる。

それだけではなかった。脱いだ服は部屋中に散乱しており、布団
は敷きっぱなし。いつ干したのかさえ記憶になかった。もはや見る
までもなかったが、確認のために台所へ移動してみた。やっぱり！
いや、それ以上の光景が目の前にあった。シンクは洗い物で溢れ、
その横には空のカップ麺やコンビ二弁当が所狭しと山積みされてい
る。これほどまで生活が荒んでいたとは今の今まで気づかなかつた。

「人はな、変わろうと思ったってなかなか変わられへん。それは
どう変わればいいか、何をすれば変われるのかわからんからや。で
も、それが目に見えるものやったとしたら変わる思わへん？」

僕は失恋を乗り越えたいと思っている。こんなにもみじめで、辛
い思いをするなんてもううんざりだ。ではどうすればいいのか、そ
の方法がまったくわからないのでこうして見ず知らずの女性に教え
を請おうとしている。

冷静に考えればおかしな話だ。こんな僕を見て人は情けないと思
うかもしれない。

「お前、恥ずかしくないのか？」

そんな声が聞こえてきそうだ。

僕も第三者なら同じ台詞を言うかもしれない。でも、人が見て恥ずかしいことをするのが恋愛だろう。面と向かって好きだ嫌いだと言ってみたり、外では人目をはばからずに堂々と手を絡め合ったりしているだろう。

失恋して情けない？恋愛すれば上がったたり下がったり、気持ちは一喜一憂するものだ。安定した気持ちのどこにときめきがあるのか。

この際人の目なんてどうでもよかった。この失恋を乗り越えるためならどんなことでも、恥ずかしいことでさえやってやる。笑いたいヤツは笑えばいい。僕は今、必死なんだ。

第19話 人が変わろうと思っても変わらないその理由（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第20話 失恋すると忘れてしまうもの

ふと、笑いが込み上げてきた。僕自身が発した「笑う」という言葉に誰よりも先に僕が反応した。必死な自分が客観的に見えたとき、おかしくてたまらなくなった。

これまでは洋子のことを一人で考え、悩んできた。でも今はテンがいる。テンが心配して、話を聞いてくれる。僕の想いをテンに話すことで、もつと客観的に見る事ができたのかもしれない。

どんな事情があるのかわからないが、テンは失恋を乗り越える方法を僕に教えようとしてくれている。この際、テンが洋子の友達か誰なのかなんてどうでもよくなった。

僕はテンの教えに従ってこの失恋を乗り越えてみせる。それでいい。そう思うと真つ暗な闇にひとつ星が見えたような気がした。

「何がおかしいんや?」

僕の笑いをテンは聞き逃さなかった。本当のことを言うのはあまりにも照れくさかったので、その理由をこれまでの会話から探してみた。

「さっきの『アリもアリも大アリ喰いやで』を思い出しまして、今ごろおかしくなってきました」

「ほんまに?」

テンの声は一瞬弾んだが、すぐ元の調子に戻った。

「でも、それでええんやで」

何がいいのか、僕には検討もつかない。しかしそれは次の言葉で明らかになった。

「自分、笑ったのなんて久しぶりとちやう？」

テンに言われて初めて気がついた。そういえばそうかもしれない。僕にはここ最近笑った記憶がない。それどころではなかった。洋子とどうやって仲直りをするか、どうすれば許してくれるのか、そのことで頭がいっぱいだった。それほど追い込まれていたということか。どうりで空回りするわけだ。

「笑いはな、辛さや悲しみを忘れさせてくれるんやで」

そう前置きしてテンは続けた。

「この間に光を照らしてくれるもの、そうやな、笑いとは月のよ
うなものかもしれへんな」

笑いは月？さっきの「恋人は太陽」の例えは見事だったが、今度
はどんな例えを見せてくれるのだろう。受話器を少し強く耳に押し
当てて、テンの次の言葉を待った。

「それはな、笑うことで気持ちがるくなるからや。明るい気持ち
ちは前向きにさせてくれる。前向きになれば道が見えてくる。つま
りな、笑いによって生まれた明るさが進むべき道を照らしてくれん
ねん」

第20話 失恋すると忘れてしまうもの（後書き）

いつも感想をいただきましてありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

第21話 笑うということ

僕は過去に笑ったときのことを思い出してみた。まず、笑いには対象があるということ。テレビや漫画を見て笑うのはそのいい例だろう。

また、友達との会話でも笑ってしまうことがある。大抵は互いの失敗談など身近な話題ではあるが、テレビや漫画と違うのは目の前に友達がいることでその場が明るくなるということだ。それは話している本人が明るくなったように見えるせいかもしれない。

少なくとも僕の話に笑ってもらったとき、僕はうれしくなる。彼にもっと笑ってほしくて話がしたいと思う。

この「もっと」がテンの言うところの「道」なのかもしれない。そうやって明るいほうへ進んで行く。僕はこれまでの意見をまとめてテンに言ってみた。

「笑うことで気持ちが明るくなるというのはよくわかります。でも笑うためには対象が必要ですよ。テレビとか漫画とか。友達との会話でもいい。それを身近なものにすればもっと周りは明るくなりますよね」

自分でもよくまとまっていると思う。しかしテンの意見は違っていた。

「自分、笑いについて勘違いしてへんか？」

勘違い、だと？笑うことで明るくなる。もっと笑いたい、もっと

笑ってほしいと思うことで気持ちは前向きになる。だから笑う対象を身近に置いておく。そのどこが勘違いなのか。

「おもしろいから笑うんやなく、笑うからおもしろなるんやで」

テンの意見を聞いても今ひとつピンとこない。人はおかしくもないのに笑えるものなのか。

「笑う門には福がくる言うやろ？笑うとな、楽しさや喜びなど明るくなるたくさんものが集まってくるんやで」

笑うと楽しくなって気持ちは明るくなる。明るいとところに人は集まるので、それがさらなる人を呼びその結果「福」となるのだろう。それはわかる。でも、やっぱり笑うためには「対象」が必要なのではないか。もう少しテンの意見を聞いてみようと思った。

「失恋したときは辛くて悲しくて、うつむいたり下を向いたりしてしまうことがあるかもしれん。でもそれでは前に進まれへん。光は前から照らすものなんや。せやから失恋したときこそ、無理しても笑って前を向かなアカンねんで」

ここまで聞いてようやく理解できた。笑う対象がなくとも無理して笑ってみれば、それを探して結局は楽しい気持ちに行き着く。ゴールは同じだったんだ。

対象が大事なのでなく、笑うことそのものが大事だということ。笑うことが先で、対象は後でもいいのだ。

では笑ってみよう。福が寄ってくるどころか気持ち悪さを覚えた。何も無いのに笑っているのである。周りから見たらおかしなやつと

思われるだろう。この不自然さを解消しなければいけない。

「今笑ってみたんですが、ちょっと不気味でした。何も無いのに笑うって不自然で、周りが見たら集まってくるどころか離れて行ってしまふんじゃないでしょうか？」

「アハハ。そらそうやる。何も無いのに笑うてたら『大丈夫ですか？』って逆に心配されてまうわ。ほんま、自分笑かしよるで」

お前が笑えって言ったんだろ？と、僕は心の中で突っ込んだ。

「そうやない。笑いてな、自分から働きかけて生まれるものなんや」

笑いは生まれるもの？自分からって、僕が人を笑わせるのか？そんなセンス、持ち合わせていないのですが。

第21話 笑うということ（後書き）

いつも感想をいただきましたありがとうございます。

あなたの励ましの一言が、次の執筆意欲につながっています。
これからも温かい目で見守ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5839y/>

大事なことはすべて失恋から学んだ

2011年12月7日23時57分発行